



# 多高図書館だより

第 75 号

平成29年3月1日

宮城県多賀城高等学校

図書委員会

## 「雑誌遍歴」

校長 小泉 博



今から五〇年以上も前のことですが、町内に貸本屋というものがありました。昭和のレンタルショップですが、そこで借りて読んだのが『少年』『ぼくら』『冒険王』などの月刊漫画雑誌でした。まだ少年漫画雑誌が週刊誌になる前のことです。当時、月刊誌は一五〇円程度だったと思いますが、お小遣いでは買えず、たくさん付録がついている一月号をお年玉で購入するのがやっとでした。それ以外は貸本屋から一日一〇円で借りてきて、「鉄腕アトム」や「鉄人28号」に夢中になっていました。その後、週刊漫画雑誌『少年マガジン』や『少年サンデー』が発行され、月に一度行く床屋に置かれるようになったので自分が好きな連載ものを四週分まとめて読んでいました。この時代は「巨人の星」や「あしたのジョー」に代表されるように漫画史に残るような傑作が生まれ、結局、週刊漫画雑誌は教員になるまで読んでいました。また、学生時代には行きつけの食堂で、成年向け漫画雑誌の『ビックコミック

オリジナル』で「三丁目の夕日」や「あぶさん」などにもはまっていました。

高校時代には異なる出会いがありました。詩人でもある国語の先生が、同級生が持っていた大衆娯楽雑誌の『平凡パンチ』をみつけて叱りながら、「高校生は『平凡パンチ』だけではダメ。『朝日ジャーナル』も読まなければダメ。」と独特の現代詩的な口調で話され、それ以来朝日ジャーナルを読み始め一九九二年の廃刊まで講読していました。また、世界史の先生の「高校生は『世界』ぐらい読んでいなければ大學に行つて通用しない。」との言葉に触発されて読み始め、大学入学後は毎月購入するようになり現在も読み続けています。大きな時代の変化や大きな出来事の特集したものは、今も保存しています。加えて、教員になってからは『ニューズウィーク日本版』を読んだり、教育雑誌『総合教育技術』や『高校教育』を定期購読したり、部活動に関わるスポーツ関係の雑誌なども講読してきました。

こうして振り返ると、漫画雑誌も含めて実に多くの雑誌を手にして読み、そこからたくさんの知識や情報を吸収してきました。自分の知らない世界の扉を開く力になってくれたのだと思います。

## 櫻井直至先生



通勤客でにぎわう朝七時過ぎ、駅のホームから私の乗った電車が出発した。大学のある中国地方のH市から帰

ます。漫画は娯楽と言えはそれまでですが、その時々夢中になったストーリーや主人公たちからたくさんことを学んだのも事実です。つまり、私の世界観や人生観は雑誌遍歴によって形成されたと言ってもよいと思います。

省先の宮城に向けて、およそ三十時間の各駅停車の旅が始まった。鞆の中には数冊の文庫本が入れてある。ジャンルは様々である。その頃によく読んでいたのは、『優しさのつとめ』（今江祥智・『赤ずきんちゃん気をつけて』（庄司薫・『夏の花』（原民喜）・『最長片道切符の旅』（宮脇俊三）・『邪宗門』（高橋和己）等々。

帰省に限らず旅行をするときには、いつも国鉄（今のJR）の「ワイド周遊券」という切符を利用することが多かった。この切符は普通列車と急行列車の自由席を利用することができ、目的のエリア内は二週間程自由に乗り降りができるうえ、目的地までの経路（往路・復路それぞれ）も複数から選択できた。ただ新幹線等を利用する場合に別料金が必要だった。学生時代、帰省にほとんど新幹線は利用しなかった。お金はなかったが、ひま時間はたっぷりあった。そして何よりも列車に乗っている時間が好きだった。もしや、

テツ鉄道ファン？しかし「乗り鉄」や「撮り鉄」「スジ鉄」その他とはいささか異なっていた。山陽本線の急勾配区間であるセノハチ（瀬野駅と八本松駅の間で上り線は最二十二パーミルを超える）を通過するときも、目は活字を追っていた。赤穂線（東岡山〜相生）も車窓の瀬戸内海よりも活字を見ていることの方が多かった。しいてあげるならば「読み鉄」だった。大阪に到着するまでに、二冊ほどは読み進んでいた。これから先、東京に向かうため「大垣夜行（三四〇M）」を利用する。この列車は東海道本線で唯一（当時）の全車自由席の夜行普通列車だった。急行型一六五系車両によるこの列車には、格安の追加料金で利用できるグリーン車が連結されていた。座席の争奪戦が激しく、特にゆったりと本を読みながら体を休めることのできるグリーン席を確保するために、ホームで三時間ほど並ぶ必要があった。待ち時間もさほど気にならなかった（この間で一冊読了）。名古屋を通過すると車内は減灯、ここで今日の読書タイムは終了となる。

翌朝五時前に東京駅に到着。ここから上野に出て、常磐線経由の仙台行き普通列車に乗る。前日の乗り継ぎの繰り返しと違って、七時間の乗り換えなし。今まで何度も途中で放棄した『死霊』（埴谷雄高）に挑戦する。しかし、三〇頁も読まないうちに挫折。この本は未だに読み終えることができていない。

十三時過ぎに仙台駅に到着。ここから実家の最寄り駅「鹿島台」まであと一時間弱である。ホームの売店で『少

年ジャンプ』を購入し、残りの時間に備える。

この「活字中毒」はいつからだろう。先天性の強度近視で、就学前から度の強い眼鏡を使用していた。母親はいくらでも本を買い与えてくれたが、暗いところで読んでいるとひどく叱られたものである。仕方がないので押し入れの中で隠れて読んだこともある。懐中電灯の狭い視野の中での読書は、また格別、物語の中に集中できた。そのまま眠ってしまった、どこに行ったのかと大騒ぎになったこともあったらしい。

三〇歳を過ぎた頃、網膜剥離で三ヶ月間、大学病院に入院し五回ほど手術を受けた。当然、その間は読書は厳禁である。NHKラジオの『私の本棚(朗読の時間)』と、家族が週に一回、図書館から借りてきてくれる朗読のカセット・テープが唯一の楽しみだった。近年はさらに加齢による視力の衰えにより、細かな文字が見えなくなってきたが、幸い、タブレット端末の普及によって「自炊」や電子書籍でカバーしている。IT技術様々である。おかげで、今後も本を読む楽しみは続けれそう。



藤木雅之先生

今回、図書委員から退職する人は「図書館だより」に読書について書くことになっていると伝えられこの文を書きことになりました。人に語れるような読書の体験がありませんので、ど

のような本を読んできたか述べていきたいと思ひます。さて、これまでの読書について振り返ってみますと、童話以外で初めて読んだ本はおそらく「怪人二十面相」(もちろん小学生向けですが)だったと思ひます。その後、学校の図書室に行つては、「ガリバー旅行記」、「十五少年漂流記」などの小説や「野口英世」など偉人達の伝記を読書してました。文庫本を読み始めたのは中学校以降だったと記憶しています。教科書に取り上げていた作家、例えば芥川龍之介・太宰治・森鷗外・夏目漱石・中島敦・寺田寅彦などの作品を主に購入してました。(漱石の「こころ」は高3の時、授業で「下先生と遺書」の部分を読んだ後に全編を読みました。)或いは、小学校で出会った江戸川乱歩や名前の元となったエドガー・アラン・ポーの作品へと読み進めました。また、中学3年の時に、多分勉強などで一生懸命さが足りないと感じた担任の先生から「老人と海」をもらい、もっと結果に至る過程を大切にせよと伝えられたことも思い出されます。さらに、高校時代は、それまで日本人の作家の作品しか読んでなかった自分に対して、周囲の人は、「車輪の下」、「変身」、「狭き門」、「若きウェルテルの悩み」など外国文学を読書し、その読書感想文を提出してました。今ならどうということもありませんが、当時は自分が幼稚に思えて、高校になるとこのような作品も読まなければならぬのかと思ひ、これら当時の高校生がよく読んでいた作品にも目を通してました。高校卒業後は、北杜夫の「どくとるマンボウ」シリーズ、

映画から小松左京の「日本沈没」、森村誠一の「証明三部作」、テレビドラマから赤川次郎の「三毛猫ホームズ」シリーズ、筒井康隆の「時をかける少女」、筒井康隆の随筆の中によく出てくる星新一のショートショートなど書店で平積みで販売されている本からおもしろそうだと思うものを読んできました。

これまでの読書の傾向に一貫したものはありませんが、これからも本屋で本をパラパラめくって心ひかれるくだりがあつたら、とりあえず買つて、もうちょっと読んでみるという行き当たりばつたりの読書になると思ひます。また、今後は老化防止のために和算の本でも読んでみたいと思ひています。

## 幸せとは何か？

3年5組 黒川 愛

「幸せとは何か？」素朴だが即答することが困難であろうこの問いに、あなたは何か答えるだろうか。私はこの本を読む前にも「幸せ」という単語はよく目にしてきた。しかし、一種の記号と同じような認識しかせず、単語の意味そのものについて深く考えたことがなかった。

私が今回、この本を読むきっかけとなったのは、以前に住野よるさんの前作『君の臍臓をたべたい』を読んでいたからだ。その作品は、人間の生と死について直接触れているものとなっている。それに対して今作の『また、同じ夢を見ていた』は「幸せ」とは何かと、人間が生きている理由を訴えかけてくる本であった。

物語は南さん、アバズレさん、おばあちゃん、そして短いしっぽを持つ黒猫の彼女が、主人公の授業で与えられた課題「幸せ」についてともに考えていくものだ。

この本を初めて手にした時は、簡単なあらすじさえ知らなかった。物語の最初の方は、主人公のさっぱりとした性格に関心を抱くだけだった。ところが後半のある場面で、それまでとは違った視点で物語が語られていくところが見えてきた。自分の想像を遙かに上回る展開に、次第に私の心は奪われていく。食い入るように読み続け、気がつくやうな時間も経過していた。この本を読み終えた時、「幸せ」の意味が少し分かったような気がした。

人は皆、違う人生を歩んでいる。生きていく時間、住んでいる場所、そして人間関係、信頼関係といったもの。それらは個人によって感じ方が違う。すなわち一人ひとりが幸せと感じる物事は異なるわけで、人の数だけ幸せがあるのだ。そのためあなたが幸せと思うことは、私もそうとは思わないかもしれない。私も私なりの答えを探し始めたが、今のところ答えは出せそうにない。難題を解決するのは、もっと多くの時間が必要になるだろう。しかし、だからこそ「私の幸せ」を見つけないと強く望み、検索を繰り返していこうと思う。

## 読書感想文

# 芸術鑑賞会

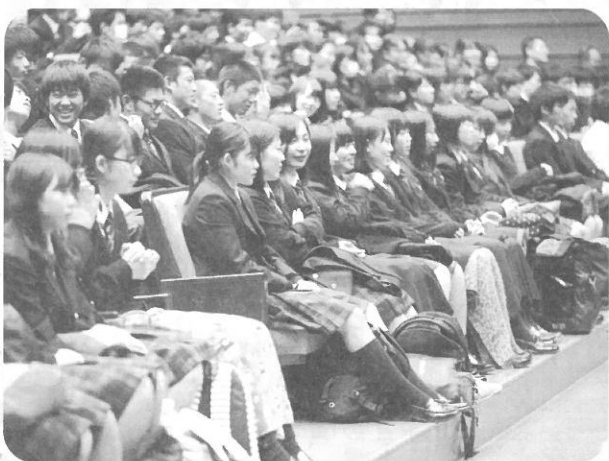
芸術鑑賞会「学校寄席」が多賀城市文化センターで十一月十五日に行われました。

今年度はオーディション順に「古典芸能」「落語」が選ばれました。当日は、雷門小助六さん、三笑亭夢太郎さん、三遊亭円丈さんの三名の噺家と、紙切り師の林家正楽さんを招き開演しました。鑑賞した生徒・教員全てが寄席の世界に引き込まれ、およそ二時間、楽しい一時を過ごすことができました。

以下は二年生図書委員による感想です。

## ■2年1組 松本 和真

十一月十五日に芸術鑑賞会が行われた。今年は落語を私たちは鑑賞した。私は落語をこれまで一度も観たことがなくて、落語に興味があった。落語は、江戸時代の日本



で完成した話芸の一種で、落語家が一人でも役も演じる。語りの他に身振り・手振りのみで物語を進め、また扇子や手拭いを使っ

てあらゆるものを表現する。そんな落語の中で、私が最もおもしろいと感じたのが雷門小助六さんの落語である。彼の落語は、話しの想像がしやすく、出だしの部分から観客を笑いの渦に巻き込んだ。落語は映像がないと話が分かりにくいと感じていたが、改めて映像がなくても話を理解できると分かった。その他にも、三笑亭夢太郎さんや三遊亭円丈さん。色物を行った林家正楽さんなどさまざまな落語家が、私たちを楽しませてくれた。今回の芸術鑑賞会で感じたことは、私たちにとって貴重な経験であると思った。

## ■2年2組 高橋 律有

予想以上の迫力があり、落語とはこんなにもすごいものなのか、と衝撃を受けました。

私は、テレビを通して落語を観たことはありますが、直接落語を聴くのは、今回が初めてでした。直接落語を聴くことは、テレビを通して落語を観るよりも断然迫力があり、また、声の抑揚、仕草、動き方や音などが、実際に観ているようにありありと伝わってきました。落語家の人々は小道具として扇子と手拭いだけしか使っていないのです。その扇子が噺の中で箸や団子として使われており、工夫して使用されていることに感心しました。小道具がたったの二つだけでしたが、落語家の人たちの技術や使い方の工夫により、落語を観ていてとてもおもしろいと感じました。また紙切りも、短時間であんなに綺麗にできあがるとは思いませんでした。

落語家は、どうしたらここまで人の気持ちをつかみ、楽しませることができるのだろうか、と驚嘆しました。

## ■2年4組 加藤 里奈

今年度の芸術鑑賞会が多賀城市文化セン

ターで「学校寄席」が行われました。

皆さんは落語にどんなイメージを持っていますか。私はそれまで難しくて話の内容も理解しにくいのだろーと思っていました。が、実際に生で観ると、想像していたよりもおもしろいものでした。はじめに寄席入門として小道具や寄席文字の紹介があり、落語について少し興味がわきました。小話が始まると、噺家の方々が作り出す世界にどんどん引き込まれて、時間の経つのも忘れるほどでした。日ごろは味わうことのない、一つの場で生徒全員が同じものを観て、聴いて楽しむという一体感を感じ、心が温まりました。紙切りは作品を切り終えるまでの早さとその緻密さに目を見張りました。観ている人を楽しませることができると、一芸を持った人はかっこいいなと思ったり、それが日本の伝統芸能として今日まで残っていることもすばらしいと思います。今回のような機会をいただけたことに感謝し、来年度の芸術鑑賞会も楽しみにしたいと思います。

## ■2年5組 阿部 海斗

伝統的な日本芸能に触れる、非常によい機会だったと思います。異国の文化を取り入れ、日本の伝統文化が衰退している現代では、将来を担う学生の私たちこそが、このような文化の再興に尽くさねばならないように思えます。この「落語」という芸能を実際に鑑賞してみると、自由な表現が可能であると同時に、限られた道具しか使えないといういささか厳しい制約があります。わずかな道具で多様な振る舞いを見せるには、噺家自身の高度な技術が求められるはず。台本はあるものの、ときにはその場で創作しながら芸を行う噺家という職業には心底驚かされました。

私自身が一番おもしろいと思った話は「時蕎麦」です。話しそのものも、後に現れた男がうまくいかず、勘定を余計に取られる不憫さに、思わず笑いを誘われるような内容で、そのうえ蕎麦をすすする表現が非



常にリアルでした。今回はいくつかの作品しか鑑賞できませんでしたが、機会があれば、また別の話を聴きたいと思いました。

## ■2年6組 樋口 優香

今年度行われた芸術鑑賞会は、「落語」や「切り絵」といった普段身近にない古典芸能を鑑賞することができました。私は初めて落語を聞きました。どの落語家の方も話し方が上手でした。一人で話しているのに何人も話しているように聞こえました。とてもおもしろかったです。

私が最も印象に残ったのは切り絵です。私は「切り絵」がどんなものか知らなかった。初めて見てとても驚きました。切り絵師の林家正楽師匠は自身で決めたものを切るのではなく、私たちに何を作った（切った）欲しいか問いかけ、その中から選んだものを作った（切った）いました。何も下書きされていない白い紙から、ハサミだけで作品を作り上げていく姿にとても感動しました。頭の中で完成図を思い浮かべながら、作っていくのは私たちに無理な芸当です。私だったら絶対に下書きがないと失敗します。いや間違いなく失敗すると確信できます。また機会があつて、観ることができたらよいと思いました。



## 貸出冊数上位図書

今年度よく読まれた本のランキングです。住野よるの作品二作がランキング。『君の膵臓をたべたい』は書名が刺激的ですが、読了後に「泣けた！」人が続出しました。

慣用句や四字熟語の本は小学生を対象として書かれているので、高校生にとっては非常に理解しやすく利用されたようです。

『羊と鋼の森』は二〇一六年本屋大賞、『コンビニ人間』は第百五十五回芥川賞の受賞作です。また、『少女』は映画化され、『ジョーカーゲーム』はアニメ化されていて、話題になった作品が読書につながっていることがうかがえます。

ランキングを参考に、これまで読んだことがなかったジャンル・作家の本にチャレンジしてみたいかがでしょうか。

順位	書名	著者名	利用数
1位	君の膵臓をたべたい	住野 よる	7
2位	ぼくは明日、昨日のきみとデートする	七月 隆文	6
3位	マンガでおぼえることわざ・慣用句 これでカンペキ!	齋藤 孝	5
3位	羊と鋼の森	宮下 奈都	5
3位	コンビニ人間	村田沙耶香	5
4位	患者のエンドロール	米澤 穂信	4
4位	また、同じ夢を見ていた	住野 よる	4
4位	少女	湊 かなえ	4
4位	ジョーカー・ゲーム	柳 広司	4
4位	マンガでおぼえる四字熟語 これでカンペキ!	齋藤 孝	4

## クラス別貸出冊数

対象期間 2016/4/1~2016/12/28



## 新着図書紹介

数学ガールの秘密ノート：やさしい統計

結城 浩

やさしい日本語：多文化共生社会へ

庵 功雄

日本の路地を旅する

上原 善広

新聞の正しい読み方

松林 薫

転換期を生きるきみたちへ

内田 樹ほか

これならわかるオリンピックの歴史

石出 法太

Q &amp; A

武村 政春

実験基本ガイド

ピエブックス

世界の絶景鉄道

海上保安協会

海上保安庁の美しい船飯

倒れるときは前のめり

有川 浩

GOSICK GREEN

桜庭 一樹

i : アイ

西 加奈子

新聞力

齋藤 孝

レジリエンス入門

内田 和俊

不登校の女子高生が日本トップクラスの

田中 慶子

の同時通訳者になれた理由

壁井ユカコ

空への助走

住野 よる

よるのばけもの

桂 かい枝

桂かい枝の「let's英語落語

朝井リョウ

一般気象学

小倉 義光

活断層が分かる本

國生剛治ほか

翻訳できない世界のことは

エラ・フランシス・サンダース

裁判所ってどんなところ？

森 炎

ひとりて探せる川原や海辺のきれいな石の図鑑 柴山 元彦  
プロ棋士という仕事 青野 照市  
スポーツと心理臨床 鈴木 壯  
聖の青春 大崎 善生

## 編集後記

図書委員会副委員長

2年2組 宮崎 繁勝

皆さんこんにちは。このたび私どもが作り上げた図書館だより七十五号を読んでもいただき、ありがとうございます。

さて、皆さんはどれくらい図書館を利用しているでしょうか？というより今まで利用したことがあるでしょうか？つい先日、私は友人に「図書館ってどこにあるの？」と聞かれました。友人は二年生です。つまりもうすぐ三年生になるにもかかわらず、この友人は図書館がどこにあるのか覚えていなかったのです。「ショック！」愕然としました。

私は皆さんにできるだけ図書館を利用していただき、その良さを知って欲しいと考えています。読書は、まず、知識を増やし、思考する視野を広めてくれます。また読解力を確実に向上させます。これは皆さんの学習に役立つはずです。図書館には二万八千冊もの蔵書があり、多賀城高校生であれば、ほぼ全て貸し出してくれます。受験を意識して読解力を向上させるにはもってこいですね。また図書館は学習で疲れた脳の休憩に最適です。夏涼しく、冬暖かい図書館。皆さんの心が安まること間違いなし。この編集後記を読んだ方々の数多くの来館を期待しています。

